

ここ神崎の地にも、春の息吹が感じられる今日よき日、第65回卒業証書授与式を挙行するにあたりまして、尼崎市教育委員会学校教育課総括担当係長 魚住誠様 をはじめ多数のご来賓の方々のご出席くださりましたこと、高いところからではありますすが厚くお礼申し上げます。

保護者の皆様、お子様のご卒業、おめでとうございます。このように立派に成長されたお子様を目の前にして、感慨ひとしおのものがおありだろうと思います。

卒業生の皆さん卒業おめでとう！皆さんとは、私の小田北中学校着任が同じで、3年間のお付き合いとなりました。中学校三年のサイクルと同じためか、例年にも増して感慨深いものがあります。今日の晴れの門出にあたり、「人間に生きる力を与えるもの」^{はなむけ}についてお話しをして、皆さんへの饒の言葉といたします。

皆さんが生まれた21世紀初頭、われわれは、希望に満ちた明るい世界を夢見ていました。しかし、現実には地球温暖化を初めとした環境問題、経済等格差の問題、人間関係の稀薄さの進行など、決して明るい航路ではありません。そして、4年前の今日、東日本大震災が起こり、予想もしなかった大津波が発生し、原子力の問題など、自然の猛威の前に人間の方がいかに小さいものであるかを感じさせられました。更に、今年先の大戦後70年目を迎えています。更に、今年先の大戦後70年目を迎えています。ですが、世界では“紛争”が続いています。

そんな21世紀の行く末を担うのが、他の誰でも

ないあなた方若者です。

皆さんは今後いつたいどのような生き方をすればいいのでしょいか。21世紀は、(新しい知識・情報・技術が社会のあらゆるところで大変重要とされる社会です。すなわち、)学習は学校だけで終わるのではなくそれぞれの分野で生涯学び続け、知識や情報を常に自らの中に取り入れていかななくてはいけない「生涯学習社会」なのです。

私は、点数で表される学習や学歴、世の中にあふれている情報を取り込むだけでは、待ち受ける困難や壁を乗り越え、成長出来ないと思っています。

フランクフルという心理学者が『夜と霧』というレポートを書いています。第二次世界大戦の時、ナチスによってアウシュビッツに収容されていた彼は、戦後、その時の経験を一冊のレポートにまとめました。そのレポートの中に、地獄よりももっとひどいと思われる極限状態の中で、最後まで生き延びたのはどのような人々か、という考察があります。

それは体が丈夫な人であつたり、強い意志を持った人とは限らなかつたということです。強制労働を強いられ立ち上がることもできなくなった時、林の向こうに真つ赤な大きな夕日が今にも沈もうとしてる。それを見た瞬間「見ろ、なんてすばらしい夕日だろう」と言う人。そして、同じように、仕事の手を止めて「本当にきれいだなあ」というようなことを言える人。そんな人が極限状態の中で、比較的多く生き延びることができたのだそうです。

そういうことを見聞きすると、人間に力を与えて

くれるもの、それは（大きな輝かしいのものであると同時に、）私たちが日常、どうでもいいことのように思っている小さなことに感動する心だということに気づかされます。自然に感動するとか、夕日に見とれるとか、懐かしいメロデーを口ずさむとか、われわれが日常何気なくしている一コマが、人間を強く支えてくれているのだということです。私たちが未来に向けて行動を起こす時に何よりも大切にしなければならぬことは、実はこの何気ないことに感動する心、自然の美しさに気づく豊かな感性にほかなりません。長い年月をかけて私たちの祖先が守りつづけてきた自然や文化を後世に伝え、また、改善したりしていくには、大きなエネルギーが求められるでしょう。そのエネルギーの源となるものは、今述べたような、大いなる気づきと、豊かな感性なのです。このことは、私たち大人も含め、21世紀の問題の打開を担う皆さん方が、決して忘れてはならないことだと考えます。

楽な道はどこにもありません。人は失敗や挫折を乗り越えながら成長するものです。そして、小田北中学校を巣立つ皆さんには、日々の教室での学習、「行事の小田北」と言われる学習などを通じて、「我慢する心」「感動する心」「人とのつながりの大切さ」など、人として生きていく上で大切なことをたくさん学んだはずです。

どうかそのことを心に刻み、伝統ある小田北中学校の卒業生として胸を張って未来に向けて歩み続けてください。

ご来賓・保護者の皆様、本日はありがとうございます

した。学校も子どもたちも地域の皆様に支えていただき今日の目を迎えました。地域に暮らす若者の健やかな成長を、今後とも見守り、ご指導いただきますようよろしくお願い申し上げますと共に一四一名の卒業生の皆さんの前途に幸あらんことをお祈りし、式辞といたします。

平成27年 3月 11日

尼崎市立小田北中学校

校長 前瀧 康彦